

一体の人形に思いを込めて

物語から読み取れる人形の気質や体格などをイメージしながら仕上げるといふ生方さんは、人形の手の取り付けから最後の頭を付けるまでに、凝った衣装で約5分で完成させます。指の動きやすさを第一に、着崩れないように補正をしっかりとしつつ、人形の顔が観客からよく見えるように全体のバランスも考えます。

現在は裏方で役者を見守ることが多いという生方さん。「客席からの拍手がうれしい。最高齢ですが、若い子たちと打ち上げに参加するのが楽しい」と顔をほころばせます。



役者見守る最高齢座員
人形の持ち味生かした着付け

生方ハルさん
-高橋場町-



YouTube

ハルさんの着付けを
見てみよう

人形ができるまで



4 衣装を着ける

3 下着を着ける

2 胴輪を付ける

1 人形師の親指・小指に人形の手を付ける

脇役極めたい
細かな所作の練習重ねる



堤優衣さん
-同小4年-

高野智花さん
-沼東小6年-

母娘二役を語る
母思お鶴の心感じて



石井愛衣里さん
-沼須町-

お互いの兄が稽古に励んでいるのをきっかけに始めた高野さんと堤さんは、三番叟の早乙女などを演じています。指の動かし方や細かな所作の練習を重ね、相手との息づかいを合わせることを意識しながら取り組んでいるといいます。脇役を極めることを目標にする高野さんは、「鈴などの小道具を使う舞がおもしろい。早乙女は自分に合っている」と話し、堤さんは「指が痛くなく、人形が外れないので動きに集中できる。生方さんに感謝」と笑顔を見せます。

石井さんはテープを聴きながら、台本を見なくても言葉が出るほど練習を繰り返してきました。「お鶴は芯が強い。一途に母を思い泣く泣く帰る姿を想像すると、泣けてくる」と話し、「我が子を愛するお弓の抑えられなくなる様相も感じてほしい」と呼びかけます。石井さんはお弓の語りを安定させることを課題とし、自分のものにしていけるように力を入れます。

「傾城阿波鳴門・巡礼の段」で、母娘二役の語りを務める石井さん。盗賊となった母・お弓が、訪ねてきた9歳の娘・お鶴を我が子と知りながら難儀をかけるのを恐れ、母親と名のらずに別れる描写を、語りで表現します。